

どうしよう……どうしよう……

少年のバイクを壊してしまった私は夕暮れの近づいた空の下、亜丁村を見おろす峠の上で一人途方にくれていた。だが、そこでいくら思い悩んでもどうにもなりはしない。どれだけ考えたところで私にできるのはただ一つ……少年に謝って、バイクの修理代を支払う事だけだろう。

擦りむいた手のひらを庇いながらノロノロとバイクにまたがりエンジンをかけると、ブォンとバイクがうなり声をあげた。壊れた箇所はクラッチレバーだけだったのがせめてもの救いだ。レバーが折れてしまったためにギアが変えられず、先程は元気いっぱい駆け上がってきた坂を、泣き出したいような気持ちでノロノロと下った。

こんな不便な山奥の村で、生活の足ともいえる大切なバイクを壊してしまい、いったい少年に何と伝えたいんだろう……悲しいけれど私にはお金を支払う事しか償いの方法が無い。修理代は幾らかかるだろう？思わずこれまで自然保護区で出会った村人達の顔が目につかんだ。もしあの人達だったら、法外な金額を要求してくるのかもしれないな……。だが少年に申し訳ない気持ちでいっぱいの私は、たとえ幾らといわれても喜んで支払うつもりだった。

宿の前に着くと暗い気持ちでバイクを止め、建物の中に入った。宿の台所兼食堂のような空間になっている部屋へ足を踏み入れると、部屋の奥の方では北京チームが宴会をスタートさせている様子だ。亜丁の少年はその手前にあるストーブの前でこちらに背を向け友達と並んで座っていた。

別にコソコソする必要も無かったが、他の人には知られたくなかったので足音を忍ばせて部屋に入り、そっと少年に近づくと背後から小さな声で彼の名を呼んだ。振り向いた少年を「ちょっと来て」と表に連れ出した私は、オズオズと少年をバイクの前に立たせ、折れたクラッチレバーを指し示すと消え入りそうな声で言った。

「ごめんなさい。私、あなたのバイクを壊しちゃったの……。本当にごめんなさい。お金を払うから、それでバイクを修理して下さい」

審判をうけるような気分で申し出た私に、いったい何事かといぶかしそうな顔をしていた少年は、折れたクラッチレバーを見るとちょっと驚いた様子をした後に笑い

ながら言った。

「な～んだあ！！こんなのたいした事じゃないよ！どうしたの！？君は大丈夫！？」

「転んじやったの……」

擦りむいた手を差し出して見せた。

「私は大丈夫。でもあなたのバイクが……」

「あんなのすぐ修理できるさ！それより他に怪我は無い？本当に大丈夫！？」

「バイク壊しちゃってごめんなさい。修理代を払うから……」

私の申し出に少年は笑いながら手をふった

「お金なんか要らないさ～！」

「え？でも……」

「そんな事心配しないで。友達じゃないか！」

少年に付いて外に出てきた少年の友人も「あんなのすぐ直るから大丈夫だよ」と一緒に声をかけてくれていた。

「だけど……」

尚も言いかける私の手をとって、擦りむいた傷を確かめると少年が言った。

「本当に他には怪我してないの？」

私は大丈夫、でもバイクが……」

「君が大丈夫なら、没问题だよ。俺たち友達じゃないか～！」

少年の言葉に思わず涙がこぼれそうだった。

少年達と建物の中に戻ると、すでに宴会がスタートして盛り上がっている北京チームのメンバーが私の姿を見つけて声をあげ、手を振ってテーブルに呼んでくれた。

「おお～、小姐！！来！来！来！来！（ライ！ライ！ライ！ライ！）」

少年達は先程まで座っていた北京軍団の円卓の脇にあるストーブの前の椅子に腰掛け、私は少年を気にしながらも北京チームに促されて招かれた円卓にオズオズと座った。

「さあ！さあ！さあ！」とすぐさまグラスを手渡され、ビールを注がれて乾杯になり「さあ食べて食べて！」と料理を勧められた。だが私は背後にいる少年が気になっ

て、テーブルの正面を向いて座る事が出来ずにいた。

「彼は私の友人なの。さっき話した美しい湖は三年前に彼が連れて行ってくれたのよ」

私が北京チームのメンバーに少年を紹介すると少年は笑顔を浮かべたが、北京メンバーの一人が「良かったら君達も一緒に座らないか？」と声をかけても少年達は、「俺たちは遠慮するよ」とテーブルには近寄ってこようとはせず、宿の主人にカップラーメンを注文した。

テーブルに並んだ料理に背を向けてカップラーメンを食べている少年達と、親しげに飲み物や料理をすすめてくれながら話しかけてくる北京軍団の板ばさみのような立場になってしまった私は、テーブルに対して横向きに座り右を向いたり左を向いたりしながら少年達や北京軍と代わる代わる会話する状態だ。本心をいえば、せっかく三年ぶりに再会する事ができた亜丁の友人と、もっとゆっくり話したい気持ちでいっぱいだったが、親切に食卓に招いてくれている北京の人達の気持ちもムゲにはできない辛い立場だ。

「何で君らは俺たちと一緒に食べないんだ？」北京メンバーに尋ねられた少年は、そっけなく一言「口に合わないよ」と答えてカップラーメンを啜っていた。いつもはあれほど人懐こい少年の頑な態度が不思議に思えた。

「ねえ、三年前のハイキングで一緒に歩いた、この村の女の子はどうしてるの？」

私は少年に尋ねた。

あの日、辺り一面にびっしりと可憐な花が咲き乱れる秘密の花園で少年と寄り添い、映画の一場面のようにロマンチックな風景を作り出していた亜丁村の少女の事だ。チベット服に身を包み、切れ長の目をした美しい少女が花園にただすむ姿は余りに可憐で、私には軽い嫉妬さえ感じられた程だった。

急にふられた話題に少年は誰の事なのか一瞬思い出せずにはいたようだが、私があれこれ説明するうちに「あー！」と手を打ち、「あの娘は彼の妹だよ〜！」と隣にいる友人を指差した。

「え！本当〜！？ 私、あの娘にも会いたいな〜」

家には三年前の旅で母が写したスナップ写真がアルバムに残されている。やんちゃな素振りの少年や美しい少女がとても可愛く写されている写真が何枚かあった筈だ。こんな事になるならあの写真を持って来ていれば良かったのに。この場で手渡して少年達が喜ぶ顔が見たかった。

それから暫く友達と話合っていた少年が椅子から立

ち上がった。

「じゃあ、俺たちは行くよ」

えっ・・・思わず少年の顔を見返す私に、少年は友人を指差すと「これから彼の家に遊びに行く事にしたんだ」と言った。ええ〜！！私も行きたい〜！！・・・思わず声を上げそうになったが、せっかく手厚く招いて貰っている食卓を食事の途中でいきなり中座してしまうのは、あまりに北京軍の彼らに失礼だろう。

でも、でも、行っちゃうの〜？・・・親が出かけるのに置いていかれる子供のような顔で、少年を見つめていたに違いない私を見返すと、少年は私の心を見透かしたように「また後で戻ってくるよ」と言った。

「・・・うん」ガッカリする気持ちを隠しきれないまま、少年の言葉に説得されたかのような気分で私は小さく頷いた。友人と連れ立って宿の食堂から出て行く少年は、ドアの前で再び私の方を振りむくと笑顔を見せて出て行った。

後に残された私は、なんだか大切な物を失くしてしまったような気分になっていた。そんな事は露知らずにいる北京軍団は「さあ小姐、食べて、食べて」と料理を勧めてくれている。先程はなんとなく北京軍とは距離を置いている雰囲気の子供達だったので、間に挟まれていた私はおちおち前を向いて食事など食べられない気分だったが、話相手が一方に絞られた事で少しホッとした気持ちもあった。

テーブルの上にはギッシリ料理が並び、時折宴会に参加しながらもまだ料理を作り続けている料理長がどんどん新しい皿をテーブルに運んでいた。毎日一人で汁麺ばかり食べていた私には久しぶりの豪華な食事だ。少年の事がまだ胸につかえてはいたが、後で戻ってくるといふ言葉を信じ、とりあえずは北京の人達の食卓に招かれてしまう事にした。

どこか晴れない気持ちを抱えつつも、北京軍団の人達との食事はそれなりに楽しかった。やはり自然が好きで美しい土地をあちこち車で旅行しているという彼らと、互いの旅行話を披露し合い、中国でお奨めの風光明媚な土地を紹介してもらったり、北京のゲストハウスの話を聞いたりしながら宴は盛り上がり、夜はだんだんと更けていった。

私達のグループが宴会で盛り上がっていると、それにつられたように1台また1台と車が宿の敷地に入ってきて次々と新車の客がやってきた。表にとめてある車と窓

越しの食堂の様子に引き付けられているのか、庭にいったん車を止めると食堂の窓に顔を押し付けて中を覗きこんでから入ってくる中国人旅行者もいた。

新規のお客たちは荷物を部屋におろすと、食堂にやってきては新たな円卓で宴会を開始するので、次から次へと入ってくるお客達でいつしか食堂にあるテーブルはすべて埋まってしまう、まるでこの日の亜丁村の客がすべてこの宿に集まってしまったような騒ぎになっていた。宿の主人は盆と正月が一緒に来たようなてんでこ舞いの大忙しだ。昨夜は私一人しか客がおらず、ひっそりとしていた宿だったのが、まるで別の場所にいるみたいだった。

「すごいね～！！なんでみんなこの宿に来るんだろう！？」

と私が声を上げると北京軍の一人が答えた。

「俺たちがいるからさ。お客っていうのは他の客がいるのを見ると安心してその場所に集まってくるもんだ。今夜、俺たちはこの宿の福の神だな！ワッハッハッハッ・・・」

酔いもまわり、すっかり上機嫌になっている北京メンバーが笑い声を上げ、別のメンバーが後につづいて声をあげた。

「小姐、俺たちがこの宿に決めたのも君がいたからだよ。つまり君は宿の主人にとっちゃ幸運の女神って訳だ。さあ女神に乾杯だ！ワッハッハッ・・・！」

いよいよ酒宴の場が盛り上がってくると、いつの間にか他のテーブルのお客達も乾杯の渦に巻き込んで、仕舞いには宿の食堂一丸となった大宴会になっている。宴もたけなわとなったところで北京軍は更に自分たちが持参した酒の瓶をとりだした。赤いラベルには「五粮液」という名前が読み取れる。この四川省の旅でもあちこちの店や道路脇の看板などでその名前を見かけていた四川省では有名な酒の銘柄で、アルコール度数が50度にもなるような白酒と呼ばれる強い酒だ。

「ええ～！でも皆さんは明日登山でしょう！？高度が高い場所ではお酒も回るし、もうこれくらいにしておいた方が・・・」と、とどまる事を知らない酒宴の盛り上がりには驚いた私が申し出た提案などで、勢いのついた中国の酒宴が収まる訳が無い。「俺は鉄人だ！こんな酒くらいなんとも無いさ！明日は全員の荷物を俺が一人で背負って歩いてやるぜ！」北京軍の男たちは真っ赤な顔をてらてらと光らせながらガッツポーズを決めてみせると、次々にお猪口に注がれた強い白酒<sup>ハイジュウ</sup>を飲み干していく。

「小姐！明日の登山は勿論君もメンバーだからな！俺たちのガイドはよろしく頼んだぞ！」

「ええ～！でも私はもう2回行ってるし・・・」

先ほどから話をしているうちに、この後の旅のコースが帰り道の理塘まで北京軍と一緒にいるのが判明し、それなら理塘までは彼等と合流して行けば良いと誘われていた。

亜丁村から稻城までの道のりは公共バスなど通っていない為、稻城に戻るには自分でタクシーをチャーターしなければならない事、そして亜丁にやってくる前に稻城で出会った上海小姐から稻城から出るバスの切符入手が極めて困難である話を事前に聞いていた私に、北京軍団の申し出はまさに「渡りに船」だったが、もう既に後にしてきた自然保護区に再び舞い戻るのには躊躇があった。

窓の外にはいつしか強い雨が降り始めていた。雨足は夜が更けるに連れて激しくなっているようだ。宴会で盛り上がる室内の中で、私は先程別れた少年の事を考えていた。時計を見ればだいぶ夜も更けている・・・こんな激しい雨が降る中じゃ、きっと彼はもうやって来ないだろう。これまでアジアの国をあちこち旅してきた経験から、こんな時の口約束が守られる事などほとんど無いのは身にしみて判っている事だった。

こんなに近くにいるのに・・・自分は何をやっているのだろう。せつかくこの亜丁村までやってきて、一番話をしたかったのはあの少年だったのに、つまらない義理にとらわれて行きすりの旅行者同士の付き合いを優先してしまった。多少の不義理は承知の上で、一緒に少年の友人の家に遊びにいけば、現地の人々の生活や暮らしぶりに直に触れる事もできただろう。そんな機会をより多く持つことこそが、私がこの旅で最も望んでいた事だった筈なのに・・・

北京の人達には申し訳なかったが、少年に会えない事が確定的になったことで微かな後悔が湧き出していた。雨の叩きつける窓を眺めながら、一人室内の喧騒とは違う場所に漂い出ている意識を呼び戻し、我にかえると私の正面に座っていた北京軍団の一人がじっとこちらを見詰めていた。見たところまだ若く、顔立ちはハンサムだが頭をつるつるの坊主<sup>ショート</sup>にしていて、先程の自己紹介で私の手帳に自らの呼び名を「石頭」と書き込んだ男性だ。北京軍の中でも、一番親しげに誘いの言葉をかけてくれていた人物だった。

「何を考えていたの？」彼の問いに「ううん、別に」と軽く受け流し、宴会の仲間入りを続けてふと気がつくと、再び彼の熱い視線が私に向かって注がれていた。その後何度も目を上げる度に彼の視線に出会ってしまい、どうやら私は石頭さんに見つめ続けられているらしい。だいぶ酔っ払っているのだろう。

はぁ・・・あなたじゃないんだけど。心の中で小さなため息がでた。

(次号に続く)